

# 向陽介護便り

平成23年11月 第67号

発行人: 向陽介護システムズ  
新宿区東五軒町1-12 青木ビル

TEL 03-3267-2015

## 「花」と「老い」の美学

事務所のベランダで今年も可憐な花が咲きました。メキシコの熱帯雨林地帯を原産地とするサボテン科クジャクサボテン属の常緑多肉植物『月下美人』です。この月下美人は、知る人ぞ知る神楽坂名物で、花が咲く夜になると、この花を觀賞にご近所の方が大勢押しかけてきます。ただ、この花は夜から咲き始め翌朝までのたった一晚でしぼんでしまい二度と開花しないのです。

ですから、花言葉は「はかない美、儂い恋、繊細、快楽、艶やかな美人」。でも、花が咲くのは年に1回だけではありません。6~11月の間で、株の体力が回復すれば2回咲くとフリー百科事典には書いてありましたが、うちの「月下美人」は、極めて体力の回復が早く、ひと月おき位の間隔で今年も4夜そのはかない姿を見せてくれましたが・・・。

(うちの「月下美人」と書きましたが、前に借りていた人が育てていたもので 現在も、同じ建物に住むお隣さんがこの花の世話をされています。)

「月下美人」の魅力は、たった一晚の命、加えて夜中に人知れず咲くところにあるのかも知れません。ある本に、「散るから花は美しい」とありました。又その本は、日本と西欧の文化の違いを「散ることをふまえた文化」と「散らすまいと努める文化」とも記していました。

日本人が木による住居に愛着を抱いてきたのは、勿論 湿度の高い風土が理由に挙げられますがいつかは朽ちて土に戻る、土にもどることによって またよみがえるという回帰の願いが心の底にあるのでは。新しさを喜ぶと同時に、古びていく過程を美にとらえ、朽ちるものへと愛情をそそぐ、花はやがてしおれ、やがて散るという危機感と愛惜によってこそ美しいのではないか、と思います。

能の理論と方向性を確立した世阿弥は、「いずれの花か散らで残るべき」という絶対の認識を踏まえて、「散るゆゑによりて、咲く頃あれば珍しきなり」と云っています。世阿弥は「風姿花伝」の中で、舞台効果の美を花にたとえ、芸の「花」の追求を目標とし、年齢や肉体の好条件によって観客を一時的に魅了するも条件が変わると共に失われる「時分の花」から、老いによっても失われる事のない「真の花」を説いています。

能ほど老いの世界を重視している舞台芸術はないと言われてます。能における老いは、「すぐすぐとして、らふらふと、花やかに、気高くあり」 人生の試練の果てに、厳しく澄み飄逸味さえ帯びた強い心境なのです。

ただ、能は男女の老いの違いも着目し、老女の能は業の深さの表現まで迫っているとの事。植物的傾向を帯びる男の老年に比べ、女性はなお動物的であり、人間的であるらしく、鬼婆への可能性を持つのは、女性の生理と執心であって、一方の男性は、残念ながら因業爺(いんごうじい)の範囲にとどまるらしい・・・。(参考: 増田正造著「能の表現」その逆説の美学)



月下美人